

2. まちづくり冊子「谷中すご六すまい編」「花曆編」の作成・活用

谷中学校
(東京都台東区)

I. 活動の背景と意味

前回、平成5年の活動助成の際に生まれた芸工展は、第二回より『まちにとびだす谷中芸工展』(以下芸工展)という形に成長しました。具体的には、谷中の町じゅうを展覧会場に見立てて谷中に関わる職人や芸術家の作品をあちこちに展示し、地図をガイドに町を巡る企画となりました。町の人が歩いて自分の目や体で谷中独特の文化を再発見し、谷中を考えていく共通の基盤ができるることを意図しています。

第三回芸工展95ではさらに、町巡りの視点を紹介する、谷中道中案内冊子『谷中すご六ーたまご版』を制作しました。これによって谷中学校独自のメディアづくりが始まり、制作過程においても町の様々な人との交流ができ、これまでわかりにくかった谷中学校の考え方、スタンスが徐々に町の中に浸透していったと思います。

谷中という限定された地域の中でのまちづくりの場合、町の人とのやりとりがとても大切であり、町の人が町のことへの関心を高めることが重要です。近年、谷中学校の活動も多岐にわたり、それぞれのテーマごとに地域の人々とより深く内容を考える段階がきていました。そこで今回の活動助成は、冊子をテーマ別でつくることで、より突っ込んだやりとりを町の人とおこない、谷中のまちづくりに役立てようとしたのです。

冊子づくりは単に発行するということではなく、そのソース集めから、制作過程、発行後のやりとり、それによる新たなソース集めと常に成長していく冊子であり、その過程自体が“やりとりのまちづくり”であることを目指しています。



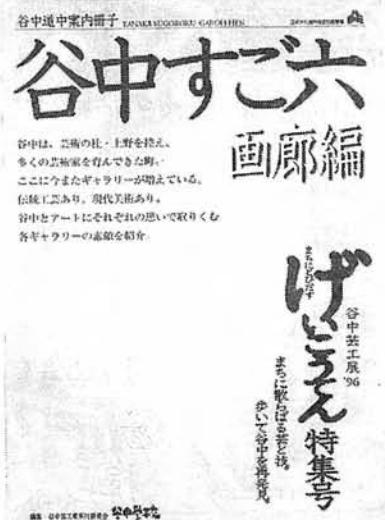
『谷中すご六ーたまご版』

II. 活動の内容 経過と展望

具体的には以下のようないい方により“冊子づくり=やりとりのまちづくり”を行いました。

*活動1：『谷中芸工展96と谷中すご六ー画廊編』

平成5年にできたすペーす小倉屋、SCAI THE BATHHOUSE をはじめ、最近ではギャラリーホシヤ、ギャラリーエン、CUSTER、CASAなど10以上ものギャラリーが出来てきました。第四回芸工展96では谷中の町巡りをさらに興味深くするために、これらギャラリーを中心に芸工展での特設展示もあわせて案内する冊子、『谷中すご六ー画廊編』を作成しました。これにより、谷中とアートに取り組むそれぞれのギャラリーの思いが紹介でき、芸



『谷中すご六一画廊編』



谷中ギャラリー すご六マップ

工展の意味合いも深まりました。また、画廊編の取材をする過程で、これまで以上にギャラリー同士のつながりを強める効果もあり、97年には上野の森美術館と谷中のギャラリー、谷中芸工展の協働による上野・谷中アートフェスも計画されています。

画廊編の発行と同時にイベント‘カードラリー’を芸工展期間中に催しました。これは画廊編の中にある『谷中ギャラリーすご六マップ』に記載されている13ヶ所の参加ギャラリーを巡り、カードを集めもらうというもので、5種類以上のカードを集めると『谷中すご六一たまご版』をプレゼント、アンケートに答えてもらうという仕組みです。これは芸工展への反響を確かめる手段として考えましたが、町ぐるみ展覧会にギャラリー巡りという目標ができて、町通りのきっかけをまたひとつ増やしました。

ただ、この画廊編は芸工展96特集号として構成してしまったため、期間後の使用・販売がしにくいという難点を残しました。これを改訂し、普段でも町と画廊巡りの頼りになる冊子にすることが、資金稼ぎという意味でも今後の課題です。

*活動2：『暮らしの諏方道再発見』

諏方道は上野台地の尾根道に当たり、氏神様の諏方神社参道に通じ、御輿ルートにもなっている谷中にとて重要な魅力ある道です。沿道には朝倉彫塑館、谷中学校、スーパー小倉屋等があり、町の人はもとより散策、法事の人たちも多く利用しています。

谷中学校では設立以前より注目し調査研究を続けてきました。今回、諏方道の魅力を高める具体的な方策を町の人と考えていくため、『まちづくり冊子諏方道編』を企画したわけです。

方法としては従来のヒアリング、現地調査等に加え、「クロスワーク」という事を試みました。谷中学校でこれまで行ってきたワークショップは、住民参加ということに重きを置き町の人の参加を主に考えていましたが、町の人の参加も常連が決まってしまいなかなかオープンな感じのものにできませんでした。そして、出てくる成果も堂々巡りになってしまふことが多く先に進むという感じになりません（行き方がへたくそということもあるかもしれません）。また、これまでの経験から、谷中では、たたき台になる提案があったほうがまちの多くの人の意見を引き出しやすい、という感触がありました。

そこで今回はいくつかの段階に分けてワークショップ等を行うことにしました。まずは

‘クロスワーク’です。これは広く都市計画、社会学、造園、行政、マスコミ等様々なジャンルの専門家に集まってもらい、2日間集中しテーマに沿って町に提案を行ってもらうものです。今まで都市計画や建築に偏っていた見方をもっと広げると共に、その活動自体が町の人に刺激を与える起爆剤となりうると考えました。

『暮らしの諏訪道再発見』では8月初めにまちとすまいのクロスワーク“暮らしの諏訪道、奪回作戦”と銘打ち、諏訪道の魅力を引き出すための提案をまとめ、成果発表の際は町の人にも見てもらい意見交換をしました。そして、8月末にアートフォラム谷中にて展示発表を行い、より広く人に見てもらい、ここまで成果をまず報告書にまとめました。その内容は地域雑誌「谷中・根津・千駄木」に掲載予定で、地域内外の人に意見を聞く機会を得ます。

今後、町の人（特に諏訪道沿道の人達）に考えてもらえるようこの報告書をたたき台に谷中学校まちづくり冊子『諏訪道編』をつくり、今度は町の人主体のワークショップや町、行政などへの意見聞き取り等‘やりとりのまちづくり’を進めていきたいと考えています。



実際に道を歩いて問題点・魅力・可能性を検証



諏訪道の今後についてディスカッション

*活動3：『混み合って住みあう 谷中初四研究』

これまで谷中学校では谷中の暮らしになじむ住まいの研究と提案をしてきました。『下町型住宅のあり方に関する調査』では谷中と清川をモデルに台東区の地域型住宅を検討しました。その中で課題としてあげられたひとつに谷中初四地区の問題がありました。

初四地区は都市基盤が整備されていない密集住宅地で、住まい単体での解決ではなく地区計画等、町で考えなければならない課題が多くあります。今回、それらの課題を解決していく糸口として まちづくり冊子『住まい編 混み合って住みあう』を企画しました。

まず、8月終わりにアートフォーラム谷中で初四地区内での協調建替えの計画案をクロスワークのイベントとして発表展示しました。この提案に対し、台東区の建築部長も興味を示し見に来ました。

12月初めここまで研究成果を基に、クロスワーク『初四・都市居住の豊かさを探る』と銘打ち、諏訪道の時と同様、専門家による提案と町の人との意見交換を行いました。ここでは主に住まい単体でできることの限界、壇（特にブロック壇のような閉鎖的なもの）が環境を悪化している点、しかし、それでも暮らしやすい町であるという点がクローズアップされました。

1月には、今回、初四研究をメインに担当していた市毛秀人がクロスワークでの提案を

一部取り入れた形で修了制作『初四に暮らす』をまとめました。ここでは特に個別敷地内の空地の有効利用とそれを支援する形で街並み誘導型地区計画制度の活用について提案しました。また、初四の町内会会報である『初四会報』に編集長菊池氏（谷中学校会員の大工棟梁）の好意により、クロスワークの様子を掲載させていただきました。今はまだその反響はありません。

これまでの初四地区の調査研究・提案の中から、ビジョンとして重要なものと実現性が高いものを選びだし、町の人にわかりやすい表現で冊子にまとめたのが谷中学校まちづくり冊子住まい編(1)『混み合って住みあう』です。

内容としては、現在初四地区の持っている都市居住の豊かさを再確認した‘暮らしやすい町とは?’、日照、通風等住環境の悪化を示した‘町の現実’、そして、‘町がよくなる住まいの工夫’では自分の住まいだけでも解決できる提案を、‘みんなで考える町の工夫’では道の使い方や協調建替え等の提案をしました。

次のステップとしてこの冊子を持って町に出、意見聞き取り等をしていきたいと考えています。

*活動4：『谷中花暦・みどり巡り』

谷中の縁についての環境学習の試みは、95年5月の「谷中・花のフェスティバル」(台東区谷中地区の祭り)で「谷中花暦」の企画を実施したことから始まりました。「谷中花暦」とは、祭りの会場に拡大した谷中の地図を設置し、来場者に身近で大切に思う花やみどりの場所を書き込んでもらう企画です。96年度はこの地図をきっかけにまちの人々とともに各季節にまちをめぐり、谷中の暮らしと自然の関係を再発見し、冊子にまとめる計画をたてました。96年6月に公募で「谷中花探し」として町巡りを実施したほかは、谷中学校会員が各自各季節に観察を続けていました。しかし、冊子づくりは、もっと多くの人の参加を得て、また観察の内容を深めてから行った方がよいと判断し、本年度は97年の花のフェスティバルに向けて「谷中のみどりマップ」を作成し、裏面で谷中のみどりとくらしの関係の例を紹介しつつ、みどりとの関わりについて意見や情報を募ることにしました。また、植物の専門家とともに行う「谷中みどり巡り」を企画しました。

谷中学校の企画が各方面にわたる一方、スタッフは限られています。暮らしと環境の問題については、主体的に関わる人を増やしながら、息長く検討していく必要を感じています。

*活動5：『通信メディアによるネットワーク』

今年度より、インターネット上のホームページ「電腦谷中芸工展96」とニフティサーバーのパティオ（電子会議室）「電腦谷中日記」を開設しました。

ホームページでは、芸工展まちかどギャラリーや諏方道、初四のクロスワークなど、リレーイベント的に行われた活動を同時報告する形でアップしていました。各イベントは地域限定・日時限定で行われていますが、通信ネットワークの上では世界に開かれ、隨時アクセスできることで、より幅広く、また質の違った交流、やりとりの機会を増やそうとしたものです。芸工展の時期は谷中学校のパソコンでホームページを開いておき、見に来た方に直接体験してもらいました。結果として、ヒット数は1000件程度と多くはありませんでしたが、メッセージを書き込んでくれる人、その後直接谷中学校を訪ねてくれる人、まちづくり活動に興味を持つ学生からの問い合わせなど「顔の見える」オープンネットワー

クの場になったのが特徴的でした。

ホームページが谷中学校の活動の公式アナウンス的性格を持つのに対し、ニフティでの会議室「電腦谷中日記」は、谷中での日常のできごとを参加者が極私的に日記的に書き込みあう場となり、まちについて個人が発信しあう面白さ、まちづくりへの可能性を発掘しました。私的な体験を通信ネットというオープンな場に書き込むことは、社会と自分とのバランス感覚を磨き、また何かその要素を探そうと積極的にまちに関わる契機になります。谷中を日常の生活舞台にする地域住民が主な書き手となり、若い母親の方など、今まで知らなかった地元の方との出会いとつきあいも生まれました。

III. 今後の活動と課題

これらの冊子づくりや展覧会、通信ネットワークを梃子とした活動で、町とのつきあいはより深まることが予想されます。その際、これまで懸案となっていた“まちと住まいの相談室”をいよいよ開設していかなければと思っています。まちへ発信した後、返信の受け皿が必ず必要となるからです。そして、“相談室”を支える地元を中心とした専門家のネットワークも同時に起こしていくことが必要でしょう。

●テーマごとに主体を増やして活動を豊かに町に広げたい

現在の谷中学校は、まちの人のまちへの関心を高めるための芸工展といった環境学習プログラムと、諏方道、初四といった具体的な場所の環境改善の提案・支援プロジェクトといった2本の柱を中心に活動しています。町会、行政、商店、ギャラリー、お寺やまちづくりに関わる研究者、作家、住民グループなど各方面との絆も強まってきました。組織対組織のつながりでなく、個人個人のキャラクターを生かして柔軟に動けるネットワークが谷中学校の持ち味ですが、しかしその分、運営体制がわかりにくく、新しい運営会員が入りにくい要因になっているようです。各企画それぞれ規模が拡大し、重複して進行するので、谷中学校の運営コアメンバーによる事務局作業は飽和状態。主体的に核となって企画運営を行う人が現れてこそ今後の豊かな展開が約束されます。テーマごとの実行委員会や協議会などの形がいいのでしょうか。運営メンバーを固定化せず、主体として関わる人が増えていくこと自体がまちづくりの目標とも思えます。

●イベントもいいけど日常が大事

これと関連して、今後強めたいのが日常的な対応です。今までではワークショップや展覧会など期間を限定して集中的な活動を行い、活動の合間はメンバー各自の仕事を中心に生活、と折り合いをつけてきました。これは谷中学校の運営メンバーの多くが自営業、自由業ゆえにつくられてきた体制ですが、イベントの合間はせっかくある谷中学校の寄り合い処（事務所）があまり開けられず、地域の人の住まいづくりの相談を受け損なう時もありました。地域の人も、日常的に身近な、まちと住まいづくりについて落ちついて相談できる場をいっそう求めるようになっています。これを実現するとなると、運営スタッフには専門家としての報酬業務と自主的まちづくりを並行して行える場と体制が必要になります。

谷中学校も設立9年目を迎え、地域の民間非営利組織（NPO）としての運営体制、活動の場と内容を地域の人々ともに問い合わせ直す時期にさしかかっています。ネットワークの体制は整ってきました。まずは、今回の助成でつくった冊子や通信ネットワークを、日常的まちづくり相談のメディアとして有効に活用していく予定です。